
ほのぼの

非国民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほのぼの

【Nコード】

N0411B

【作者名】

非国民

【あらすじ】

祭りに行った兄弟を襲う不幸とは？日常のほのぼのとした情景を描いた作品です。

オレは、何故こんなところにいるのだろうか？
オレは、何もしていないはずなのに……。

夢なら早く覚めてほしい。

勇人^{はやて}は警察官に説明しながら、心の中でそう呟いた。

——三時間前——

今日は近所の八神神社で秋祭りがあった。

「お兄ちゃん、早く早く。」

早く祭りに行きたいのだろう。妹の由紀^{ゆき}がオレの手を引っ張る。
由紀は、昨日八歳になったばかりで、オレとは十歳離れていた。今日は母が作った朝顔の柄の浴衣を着て祭りに行くため、すごくご機嫌みたいだ。

「ちよっと待てよ。」

父が他界し、母が病床に伏せっている今、オレが由紀の面倒をみてやっているのだ。

「もう、早くしないとお祭り終わっちゃうよ。」

早く行きたいのだろう、バタバタと駆け足している。

実際には祭りが終わるまで、まだ三時間以上はあるのだが……。

「分かったから待っててば。」

戸締まりが済んだら行くから。」

玄関の鍵を掛けながら勇人は言った。

戸締まりを済ませ、玄關の外で待っていた由紀の手を引く。

「おまたせ。じゃあ、行こっか。」

「うん。」

オレは、由紀と手を繋いで八神神社に向けて歩きだした。

カラン、コロン、

由紀が歩くたびに、小っちゃなゲタから小気味よい音が聞こえてくる。

「なあにを買ってもらおっかなあ。りんご飴えにいお人形。」

祭りで沢山おねだりされるんだろなあ……。勇人はこれから起くるおねだりの嵐を想像し、苦笑いを浮かべた。

—— 八神神社 ——

神社の参道では、夜だというのに昼間のような明かりを放っていた。

「わあ〜っ。いろんなお店がいっぱいだね。」

沢山の出店が軒を連ねている。

由紀は、色々な出店に目移りしているのか、あっち行ったりこっち行ったりとフラフラしている。

「おい、あまり離れると迷子になるぞ。」

勇人は慌てて由紀を追い掛ける。

「こら、迷子になったら大変だから、一人で勝手に行くなよ！」

由紀を捕まえ、勇人が注意を促す。

「ごめんなさい……。」

少しきつく言いすぎたかな？由紀のションボリとした顔を見、勇人は祭りを楽しみにしていた由紀に申し訳ないなど、思った。

「まあ、なんだ……。祭りはまだ始まったばかりだ。

ゆっくりと見て回ればいいだろ？」

由紀の手をしっかりと握り、由紀の行く方へと付いて歩いた。

「あっ、お兄ちゃん。アレしたい。アレー!!」

由紀がピョンピョン跳ね、勇人を引っ張っていく。

「おいおい……。そんなのをするのか?」

勇人の目に飛び込んだできたのは、赤やピンクなど、様々な色に着色されたヒヨコ達の群れであった。

ちらつと由紀の顔を見る。

カラーヒヨコがよっぽど欲しいのだろう。目をキラキラと輝かせている。

「はあ〜っ。一回だけだぞ?」

「うん」

勇人は店の親父さんに五百円を払い、コーンで出来た杓子を受け取る。

「ほら。」

それを由紀に手渡した。

「ありがとう、お兄ちゃん。」

由紀は浴衣の袖を捲り上げ、ヒヨコをじっと見つめる。

周囲を緊張が駆け巡る。

後ろでは、観客達も事の成り行きをじっと見つめている。

「えいつ。」

由紀は上手にヒヨコを掬い上げ、それを手元のお椀に入れる。

と、同時に、ヒヨコの重さに耐えきれなかった杓子がぽつきりと折れた。

それを見ていた観客達から一斉に拍手が沸き起こった。

「ありがとうございます。」

周りの観客にお辞儀をしたあと、由紀はピンクのヒヨコが入ったお椀を親父さんに渡した。

「おめでとう。お嬢ちゃん。可愛がつてあげてな。」

親父さんはヒヨコを箱に入れて由紀に渡す。

「うん。」

由紀はにっこりと微笑んだ。

「ピヨピヨピヨ」

「ぴよぴよぴよ」

よほど嬉しいのだろう、ヒヨコがピヨピヨと鳴くと、由紀もそれに併せてぴよぴよと言っては、笑っている。

勇人はその姿を後ろから見、くすりと笑った。

「あつ！勇人じゃない。どうしたの？」

突然名前を呼ばれ、声のした方を振り向く。

「あれ？奈緒こそどうしたんだ？」

彼女は奈緒。^{なお}

オレの幼なじみで、ボーイツシュな髪型で丸い眼鏡。

いかにも優等生だといわんばかりの女の子だ。

「私は友達とお祭りに来たの。」

奈緒の横にいる長い髪の女の子が軽く会釈をする。

彼女達はお揃いの花火の柄の浴衣を着ていた。

「もしかして、勇人は一人で来たの？」

どこか哀れむような目で見られ、勇人慌ててそれを否定した。

「違うつてオレは由紀と一緒に来てんだよ。」

あいつ、前から祭りを楽しみにしていたからな。」

と、そこで由紀の姿が見えないことに気が付いた。

「由紀？由紀！-」

周囲を見回す。が、由紀の姿が見えない。

「ごめん。ちよつと由紀を探してくる。」

そついうと、勇人は人込みの中に入っていった。

「ちよつ……。」

奈緒が呼び止めるが、その声は勇人に届かなかった。

「由紀！どこだ！由紀！」

周りの目なんて気にしている余裕はない。勇人は由紀の名前を呼び、人込みを掻き分けていく。

と、自動販売機の前で泣きじゃくる女の子がいた。

「由紀か？」

その女の子へと近づいていく。

「ひつく。ひつく。お母さん。」

その女の子も母親とはぐれたのだらう。泣きながら母親をずっと呼んでいる。

（由紀も、オレを探しているだろうな……。）

そう思うと、女の子を放つてはおけなかった。

「迷子になったのかな？よかったら、お兄ちゃんが一緒に探してあげるよ？」

一歩間違えたら人さらいと間違えられそうだが、女の子はこちらをちらつと見ると、こくんと頷いた。

「よし、じゃあ泣くのはやめて、一緒に探そっか。」

勇人はそう言う、女の子の手を引いて歩き始めた。

「君、名前は？」

ふじかわさとし

「藤川幸子……。」

話を聞くと、どうやら彼女は由紀と同じ年らしい。

今日はお婆さんの家に遊びに来ていて、そのついでに祭りに寄ったとか。

「ひつく。お母さん。」

（ん……、困ったなあ。由紀も心配だし……。）

「そうだ。」

勇人は幸子を肩車した。

「ほら、こうするとお母さんがいれば、よく見えるよ。」

「うん。」

女の子はにっこりと微笑んだ。

「藤川幸子ちゃんのお母さん、いませんか？」

「お母さ〜ん。」

十分くらい歩いたところで、幸子のお腹がぐうぐうと可愛い音を出す。

「ははは。」

勇人は近くのチョコバナナを売っているお店で、チョコバナナを二本買った。

「幸子ちゃん、お腹すいたんだね。これ、食べる？」

「うん。」

二人は、チョコバナナを食べ、再び歩きはじめた。

P r r r r P r r r r

と、勇人の携帯電話が鳴り始めた。

名前を見る。奈緒からだ。

「もしもし。どうした？」

「どうした？じゃないでしょ。由紀ちゃんがいたから、電話してあげてるんじゃない。」

どうやら、奈緒も由紀を探してくれていたのか、由紀を見つけたと電話をくれた。

「神社の境内で待ってるから、すぐ来てよ。」

そう言うと、電話はプツンと切れた。

（神社の境内か……。でも、先にこの子をお母さんに届けてあげないとな。）

「あつ、お母さん!!」

突然、女の子が声を上げ、指を差す。

「幸子!!」

彼女の母親が顔を綻ばせ、こちらへと近付いてきた。

「ありがとうございます。」

女の子の母親はしきりとお礼を言ってくる。

「よかったわね。優しいお兄ちゃんがいて。」

母親が女の子に微笑む。

「うん、このお兄ちゃんね、幸子の股の間に頭を突っ込んでね、よく見えるよ。っていつてね、お兄ちゃんのチョコバナナを食べるか
つて、幸子にチョコバナナをくれたの。」

『えっ？』

それからの母親の行動は素早かった。バッグから携帯電話を取出し、
110番。

近くをパトロールしていた警察官と話をする羽目になってしまった。
それまでの行動が早すぎて、勇人は逃げる暇さえなかった……。

「では、君は本当に何もしていないんだね？」

「だから最初っからそう言ってるでしょ。」

勇人と警察官のやりとりが終わった後、早とちりしてしまった女の子の母親はしきりに『すみません』と言ってきた。

（奈緒のやつ、怒ってるだろうな……。）

勇人は、奈緒達の待つ境内へと急いだ。

神社の境内で待っていた奈緒に、

「遅い!!」

と怒られたのは、言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0411b/>

ほのぼの

2010年12月10日02時28分発行